

群馬県としては、みならわなくではと思っている次第です。道のりも山形中央自動車道ができて、鶴岡まであつというまでした。一番変わったのは鶴岡の町中で、開発が進み大学周辺も店だらけになつて、北ほ場は駐車場に変身していました。(ちよつと残念)

昨年はオープンキャンパスにも参加させてもらい、学生の生き生きとした取り組みにいたく感動もしました。敷地内いっばいに広がった校舎の数を見るにつけ、この子たちもまた、他県に出て行つた時、また山形の良さを再確認するであろうなと思つたりしました。

教えを請うた先生方も次々に退職なさつて寂しい限りですが、先輩が先生としていらつしやるので、また来年もご挨拶に行きたいと思つています。

来年こそは先輩のおごりではなくて、食べたことのない上寿司を注文したいと思つています。

後何年県職員でいられるかどうかわかりませんが、できる限り山形を訪れその魅力にどっぷりつかつて、ストレス解消したいと思つています。

## 米国滞在で感じた 日米の感覚の違い

千葉大学園芸学部緑地環境学科

高橋 輝昌

(平成3年林学科卒)

職場(千葉大学)のサバティカル研修制度を利用し、平成24年4月から1年間、米国ワシントン州シアトル市にある、ワシントン大学環境学部森林環境学科に滞在した。

米国滞在中、日米の考え方やスケール感の違いを感じる事が多かった。私の研究テーマの二つは森林生態系での養分動態の把握である。渡米前から、米国ではこの分野で日本と比較して大規模な研究が行われていることを認識してはいた。実際、ワシントン大学でもこの分野での規模の大きな研究がたくさん行われていた。何人かの大学院生の調査に同行して話を聞く、たいていの試験地では長期間(20年とか30年とか)にわたつて測定が継続され、あるいは計画されていた。また、試験地が広範囲に分布している場合には、担当の学生が1年とか一年半とか、長い期間をかけて、すべての試験地を回り、試料の採取や測定を行つていた。



米国ワシントン州での土壌調査にて

その一方で、彼らの大雑把さにも気づかされる事があつた。長期間にわたつて多くの試験地から試料を採取する場合、「試料の採取時期が試験地によって違う」などという事は10年単位の変化を把握したい彼らにとつては些細な問題らしい。また、ある森林内の数カ所で土壌試料を採取する場合、日本人研究者の感覚では「地形や地表の落葉落枝の堆積状況が平均的な場所」を数カ所選んで採取する。その考えに基づき、私が採取地点を探していると、同行していた米国人教員が、膝の下に敷いていたクッションを投げ、クッションが落ちた地点を指さして、「次の採取地点はそこだ!」と言う。初めは冗談かと思つた。でも、それが彼らの感覚のようである。試験地の広さ、

試験地数の多さ、調査期間の長さ、といった「スケールの大きさ」は彼らの大雑把さとのトレードオフと考えられなくもない。広い国土を持つ米国らしい発想だと感じた。

このような体験を重ねるうち、当たり前のことではあるが、外国人の研究に接する際には、研究者の母国での環境や考え方が研究にも反映されていることを意識しなくてはならないと改めて思うようになった。日本の森林生態系を扱った研究も、日本の環境や日本人の考え方を理解していない外国人には、単に「ちまちました研究」としか映らず、正しく評価されないように思う。日本の学術界で唱え続けられている「国際化」のあり方についても考えさせられる米国滞在となった。

## 若いつもり

岩手県一関農村整備センター

葉上 恒寿

(平成14年生物資源学科卒)

はじめに、東日本大震災津波で犠牲になられた方々の御冥福をお祈りするとともに、今なお応急仮設住宅等で不自由な暮らしを余儀なくされている方々をはじめ、被災

された皆様に対し、心からお見舞いを申し上げます。

山大農学部卒業後、既に10年以上経過しているという事実には衝撃を受けたのはつい最近のことだ(本稿の参考に前号の鶴窓会だよりを送付していたところ、同期と知り合いが寄稿しており、卒業して10年との「文が」。就職後、異動により幾つかの職場で働く機会を得たが、常につづ端で諸先輩方から若者に分類され続けてきた所為か生来の図々しさ故か、今でも若いつもりで居るのだが(何となく20代中盤だと思つている節がある)、ふとした時にもり年齢と実年齢の差に激しい戦慄を覚える、ということが年に数度あり、今回はまさにそれだつた。

在学当時の私は、果たして10数年後の現在の状況を想像したことがあつたのだろうかと思う。バイオテクノロジーで農業を発展させたい、入学前に抱いた夢は、研究室配属時にはどこかに置き忘れてきたようだつた。育種学研究室の門を叩き、故笹原健夫先生、昨年度退官された阿部利徳先生に指導を仰ぐこととなつたが、既に学業以外に精力の大半を注ぐようになっていた私は、決して褒められた学生ではなかつただろう(特に指

導教官の阿部先生には多大な迷惑をお掛けしたこと、この場を借りてお詫びする。そのくせ他大学に進学し研究を続けたいと考えていたのだから性質が悪い。今となれば身勝手さを省み、その後進学先で相当苦労することになるよ結果出なくて毎日日付変わってから帰宅だよ馬鹿じゃないのお前、と注意を促したいものだが、当時その様な危機感は無く、漫然と研究に取り組んでいたのだ。

紆余曲折を経て、現在私は岩手県職員として農業に携わっている。今度こそバイオテクノロジーで、と思つてはみたものの、希望を叶えることは難しい。学生時分全く関心が無かった土壌や肥料について研究することになったし、野菜栽培の技術指導を担当することにもなった。そして現在はどういう理由か基盤整備事業を扱う部署に配属され、事業の推進と集落営農組織の設立、運営支援という慣れない仕事に悪戦苦闘している。

少なくとも、山大卒業時点では、農業に関わる仕事に就く選択肢は無かった。だが、不思議なもので、現在は岩手の、そして日本の農業の発展に多少なりとも貢献すべく日夜取り組んでいる。何故そのような道を選んだの

か、改めて考えても明確な理由を見つけることは難しかったが、興味を持つことができなかった在学中の講義の数々が実は自分の知らぬところで血肉となり、背中を押してくれたからなのかも知れない。

.....



## 現在の演習林

山形大学農学部附属  
やまがたフィールド科学センター  
流域保全部門上名川演習林  
技術職員

## 新井 大輔

(平成18年生物環境学科卒)

この度、鶴窓会事務局庶務を仰せつかりました平成18年生物環境学科卒業の新井大輔と申します。何分、不慣れなことも多く御迷惑をお

掛けするかとは存じますが、今後、会員の皆様と鶴窓会のお役に立てるよう精進して参る所存でございますので、どうぞよろしくお願い致します。

さて、私は農学部附属やまがたフィールド科学センター上名川演習林にて技術職員をやっております。この場をお借りして最近の当演習林についてご紹介したいと思います。

現在、山形大学農学部は1学科6コース制となり、主に森林科学コースや水士環境科学コースの学生達が演習林をフィールドとして研究・実習を行っております。その内容も多様となり、従来より行われていた森林生態学や河川環境学に加え、庄内地方伝統の焼畑による温海カブ栽培や、牛や羊を幼齢スギ人工林に放牧し、下刈りの替わりをさせる育林放牧などの農業と林業を併せた「アグロフォレストリーの実践」といった新しい試みも行っております。

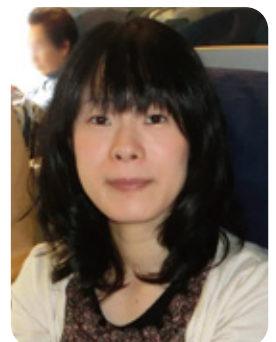
また、地域に根ざし開かれた演習林を目指し、小学生を対象とした「森の学校」や在来作物実践講座「おしゃべりな畑」の实地授業の場としてなど、広く地域の方々に足を運んで頂いております。さらには、昨年度に文化庁より

寺社仏閣など文化財建造物の修理に必要な資材のモデル供給林及び研修林となる「ふるさと文化財の森」に演習林の一部のスギ林が設定されるなど、その活躍の場を広げております。

このように、演習林では様々な事業が行われ、多様な顔を持つようになりました。しかしながら、皆さんの思い出がそのままの形で残っているものもたくさんあります。

私自身、演習林での仲間との実習や活動といったものは、大学生活において掛け替えのない思い出となっております。OB、OGの方の中にも、同じ思いの方も多いのではないのでしょうか。

現在山形大学では、卒業生との交流として研究室等を開放するホームカミングデーを開催しております。こちらは、当演習林においても開催可能となっております。何年、何十年と時を経てもお、当時と同じ気持ちにさせてくれる演習林に是非お越し下さい。演習林スタッフ一同、心よりお待ちしております。



## 大学生活と就職して

J A 庄内みどり農業協同組合

## 今田 恵理子

(平成21年生物生産学科卒)

本大学を卒業し、卒業後も農業に係わることが出来る仕事に就きたいと願い、地元酒田市の庄内みどり農業協同組合へ入組して早いもので5年目を迎えました。あつという間に過ぎた日々でしたが、とても貴重な体験と様々な出会いを経験させていただきました。

小さい頃から祖父母は稲作を全面委託しておりますので農業に触れる機会はほとんどありませんでしたが、幼いころより植物に興味があり、特に秋に黄金色に変わる水田が大好きでした。進路に悩んでいた平成16年に、台風が東北地方に上陸し、農作物に甚大な被害を残していき、黄金色にならない水田を初めて見ました。黄金色になら

ない水田を見た時、とてもショックを受け、その原因について学びたいと思い、平成17年度に本大学農学部生物生産学科へ入学いたしました。

大学生活では、農業についてはもとより環境問題について、また農場での実習を通して、また農場での実習を通して、いままで経験したことがないたくさんさんの貴重な体験をさせていただきました。また、作物研究室に所属して、藤井弘志教授のご指導のもとで、本大学に入学するきっかけとなった潮風害についての研究をさせていただき、潮風害について多くを学ぶことができ、とても勉強になりました。そして大切な仲間と出会うことができ、現在も交流できることを嬉しく思います。

本大学卒業後は農協に就職し、最初は営農課で米の販売業務に携わり、倉庫担当として働きました。大学で米の生産については学びましたが、米の出荷や精算方法など初めて知ることが多く、とても勉強になった2年間でした。その後、園芸課へ異動となり、販売担当として青果市場の方と直接関わるようになり、営農課とかなり異なる業務内容でしたので、最初はかなり戸惑い、青果物の出荷量などが日々異なるのが悩みましたが、青果物の集

出荷についても少し学ぶことができました。2つの分野とももっと学びたいことが多かったのですが、園芸課を2年間経験した後、共済課に配属されました。最初は今まで経験した部門とかけ離れているように思え、また、共済の知識も乏しいのでとても悩みました。しかし、どの部門でも、農協に就職したいと思つた「農業に係わる仕事につきたい」という願いは叶えられているように思います。これからも、生活の基本である農業を支える一人という思いを大切にして働いていきたいと思つています。

## 在学生の声

### 庄内での暮らし

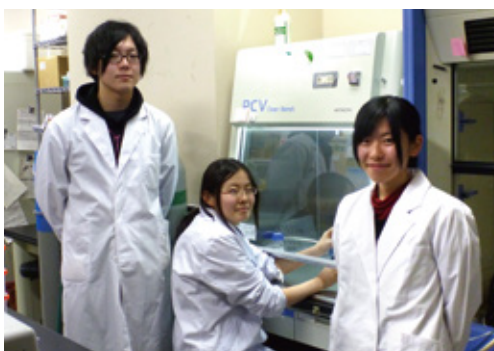
高村 省伍

(食料生命環境学科  
植物機能開発学コース 4年)

鶴岡市に越してきて2年と半年。すっかりここ庄内での暮らしに慣れてしまいました。鶴岡市に住み始めて間もない頃は、田畑や山があるだけで何も無い所だなあとうんざりしていましたが、数ヶ月経つと様々な良いとこ

ろに気が付き始めました。ビールに最高に合うだっちゃん豆や温海カブなどの特産品、地域の人々が使う庄内弁の耳心地のよさ、満天の星空が一望できる静かな夜、少し足を延ばせば絶景の湯野浜海岸、そして何より地酒が美味しい。住んでみると意外と住みやすく、飽きの無い毎日を過ごせることが分かってきました。

私は現在、微生物資源利用学研究室に所属し、服部聡先生のもとご指導受け賜っております。本研究室では、未知・未利用・未培養の微生物の探索研究をしています。私の卒業論文のテーマとして、月山弥陀ヶ原湿原池塘水の好酸性放線菌をターゲットに、日々培養や、DNA抽出、PCR、クローニング等に励ん



微生物資源利用学研究室で筆者高村省伍氏と出村真理・佐々木捺美各氏

でいます。研究室の同期や先輩は皆愉快な人たちで、誕生日会や飲み会、くだらない話で盛り上がる等、毎日笑いが絶えず、楽しい研究室生活を送っています。

さて、お気付きかと思いますが、前文にビールに「や地酒が」と書くほど私は大変酒好きであります(学生のくせに生意気だと思おう方もいらつしやるかと思いますが)。鶴岡市に住むまで、日本酒は好きではありませんでした。しかし、あるサークルと出会ったのがきっかけで、週に一度は必ず飲む程の好物となりました。それは、「日本酒研究会」です。「日本酒研究会」とは、ただ日本酒を飲むだけでなく、造り方を一から学び、実際に酒米から醸造し、出来上がった日本酒の味やのど越し、どうしてこのような味になったかを追求、探求していく非常に本格的なサークルです。顧問の阿部利徳先生のご指導のもと、部員全員で協力し合い、「米の雫」という純米酒を造り上げました。更には庄内の酒蔵を訪れ、醸造過程を見学し、知識を深めていきました。こういった活動から、次第に日本酒が好きになり、味わい方や、醸造の大変さ、日本酒の歴史等文字通り全身を使って学ぶことができました。

た。中でも学生のみで一本の純米酒を造り上げたことは、私の大学生活の中で一番の思い出もあり、一番胸を張って周りに言いふらせることだと思つています。

最後になりますが、私がかつて充実した大学生活を送ることができたのは、大学の先生方、同期、先輩、後輩、その他お世話になった方々、そして父と母の御陰であります。この大学で学んだことを十分に活かせる職種に就くことが決まったのも、私に関わってきた全ての人たちが、私をここまで育て上げてくれたからだと思います。感謝の気持ちを忘れず、残り数ヶ月となった庄内での暮らしを満喫しようと思つています。

「在学生の声」の執筆を推薦していただきました阿部利徳先生に深く感謝を申し上げます。

## 視野



## 飯沼 久仁佳

(食料生命環境学科森林科学コース4年)

山形大学に入学した理由、と言われると、特に大きな理由を私は持っていません。視野が狭い人間にはなりたくない、環境の違うところで暮らしたい。そう思い、とにかく地元である関東地方を抜け出したかったのです。山形大学前期入試の日、初めて東北地方に足を踏み入れました。

一方、農学部に入学した理由は明確でした。高校生物の遺伝学分野が好きで、バイオテクノロジーの研究に携わりたいと思ったからです。当然、入学した当初は、資源系統のコースに進むつもりでいました。私が入学した平成22年度から、農学部は1学科6コース制となり、1年生の時点では専門分野がなく、多くの分野について広く学ぶことになっていきます。分野ごとに隔たりなく学ぶことにより、「ここに進むしかない」と一点に集中していた私の視野も幅を持ち、他のコースにも興味を持ち始めました。結局、1年生後期にあった希望コースアンケートでは、第一希望欄に森林科学コースと記入しました。そのまま無事、森林科学コースに進むことができました。

希望通りに滞りなく進学できたわたしですが、それでも時折、山形大学に入学したことを後悔することがあります。都市部出身の私には、鶴岡は魅力の薄い場所だと思えたのです。もともと受験勉強を頑張れば別の大学に行けたのではないかと、別の道を切り拓けたのではないかと……。考えても詮ないことですが、ふと脳裏を過ぎってしまいます。しかし、研究室に配属された頃からそう考えることは少なくなりました。私の配属された森林生態学研究室(旧地域生態)では、樹木の生態について日々研究を行っています。調査地はもちろん山の中にあり、大学から1時間足らずで行くことができます。調査でなくとも、散歩がてら公園に行っても、散歩がてら公園に行っても、樹の様子を見たり、赤川周辺の河畔林の観察をしたりすることもできます。研究を始める前までは娯楽の少ない魅力のない土地に思えていましたが、自然を相手に研究するとなると、鶴岡の地はまさに適地であると言えます。一部を見て嫌だ嫌だと思わず、視野を広げて考えれば、良い所もみえるものだと実感しました。今では山形大学に進学して良かったと思えるようになりました。

残りの大学生活は短いように思いますが、視点を交えてみると、まだまだ長い道程であるようにも思います。やるべきことはたくさんあります。詰まったときは焦らず、落ち着いて視野を広く持つようにする。そうして残りの学生生活を、より充実したものにしていきたいと思っています。

## 私の大学生生活

### 鎌田 有佳理

(食料生命環境学科  
食品応用生命科学コース3年)

山形大学の農学部に入学してから、あつという間に2年半が過ぎました。大変なこともありましたが、思い返して出てくることは楽しい思い出ばかり。改めて山形大学農学部に入ってよかったなと感じました。

印象に残っているものに、雪山実習とサマースクールでの韓国訪問があります。雪山実習とは、森林コースのロペス先生が担当の実習で、山大農学部の持つ広大な演習林の中に入り雪山を学ぶものです。本来は森林科学コースの人たちが学ぶ領域なのですが、他コースの人たちでも充分に楽しみながら学べるプロ

グラムになっていました。地熱や昔の人々の雪上の歩き方を学んだり、歩くスキーやスノーモービルを体験しました。プログラムの二つとして、3m程ある雪の断層を班に分かれて調査し、それを理解したうえで班ごとに大きな雪山が与えられ巨大かまくらを作りしました。雪国生まれの私でもあんなに大きなかまくらは作ったことが無く、大変な作業になりましたが、みんなで工夫を凝らしながらかまくらを作るのはとても楽しかったです。

サマースクールでは、山大農学部の提携校である韓国の忠北大学校農業生命環境大を訪問しました。向こうの学生との交流を通じて国際交流をしながら韓国の文化を学んだり、農業施設を見学

することで、韓国の農業の特色を学んだり、めったに見ることのできない農業機械を見ることができました。韓国では忠北大学に通っている学生の家にホームステイをしたのですが、韓国語の喋れない私には言語の壁があり、お互いに英語・日本語・韓国語を混ぜて会話をしました。言語を学ぶことは大切だとも思いましたが、同時に人は言葉が無くても通じ合える何かがあるとも感じました。また、韓国の百済の時代などの歴史についても深く知ることができました。

この様な特色あふれる山大農学部ですが、私がこの大学で一番好きなのはなんといっても人の温かさや優しさです。こんなに生徒と教授とが仲の良い大学は珍しいと思います。教授達、事務の方々、学生、学内清掃をしてくださっている方々、どの人もみんな優しく、毎日の学校生活がとても楽しいです。

大学によつては自分の専門しか学べないところがありますが、山大農学部は自分が二歩踏み出しさえすれば広い分野を学び体験することも可能にしてくれる大学です。これからも好奇心と勇気をもつて、様々なことを経験していきたいと思えます。

